

東京都下宅部遺跡から出土した 縄文土器付着植物遺体の分析

Characterization of Plant Remains on Jomon Potteries
Excavated from the Shimo-yakebe Site, Tokyo, Japan

工藤雄一郎・佐々木由香

KUDO Yuichiro and SASAKI Yuka

はじめに

分析結果

考察

おわりに

[論文要旨]

東京都東村山市下宅部遺跡では、縄文時代中期から後・晩期の土器の内面に付着した炭化植物遺体(土器付着植物遺体)が40点見つかった。これは、土器の内部に炭化して付着した鱗莖、繊維、種実、編組製品などの植物起源の遺物を総称したものである。いずれも二次的に付着したのではなく、調理や植物を加工する際に付着した植物であり、当時の人々が利用していた食材と土器を用いた調理方法を解明する大きな手がかりとなる資料である。本研究では、そのうちの26点の土器について¹⁴C年代測定、炭素・窒素安定同位体比分析、C/N比の分析を実施し、これらの土器付着植物遺体の年代的な位置づけ、および内容物についての検討を行った。また、単独で出土し、所属時期が不明であった種実遺体5点の¹⁴C年代測定を行い、年代的な位置づけについて検討した。その結果、分析した土器付着植物遺体は縄文時代中期中葉の1点を除き縄文時代後・晩期に属する年代であり、特に3,300～2,700 cal BPの間に集中し、そのほとんどが縄文時代晩期前葉～中葉であることが判明した。種実遺体のうち、縄文時代中期中葉の約4,900 cal BPの年代を示したダイズ属炭化種子は、直接年代測定されたものとしては最も古い資料となった。土器付着植物遺体の炭素・窒素安定同位体比とC/N比を下宅部遺跡出土の精製土器付着物の分析結果や、石川県御経塚遺跡、大阪府三宅西遺跡出土の縄文時代後・晩期の土器付着炭化物の分析結果と比較してみると、下宅部遺跡の土器付着植物遺体は、陸上動物起源の有機物や海洋起源の有機物の混入の可能性が指摘されている土器付着炭化物とは分布傾向が明らかに異なり、C₃植物に特徴的な傾向を示した。特に、編組製品や繊維付着土器では、編組製品や繊維そのものと、それらと一緒に煮炊きした内容物の同位体比が異なることが明らかになった。今後、土器付着植物遺体の分析事例を増やし、縄文時代の植物利用や土器を用いた調理についての研究を展開していくことが必要である。

【キーワード】土器付着植物遺体、植物利用、¹⁴C年代測定、炭素・窒素安定同位体分析、C/N比分析